

うつつふ。

「どうしたの」

なにはともあれおじいさんになってしまったんだよ。

「そっか、残念だな」

なんで？

「おじいさんはおばあさんとよろしく真剣についていう言葉を増やしたいって意味なのに」  
イミフ。

「そう！ 私こそが！ ○坂社長だ！」

誰?!

「ということが始まるよお！」

誰だあ！

はい、みなさんよろしくね！

「誰に何を言っている」

いや、ね。私のことを感情路線に乗せたらどこに行くかなと思って。

「はいはい、そういうことにしておくわ」

うそじゃないもんねー。

「そうなんだ」

まあまあ、その辺にしとこうよ。

「いや、喧嘩なんてしないけれど」

うるさい！　いつもあんたはそんなことを言つて話をはぐらかすくせに！

「おうした？」

私が欠片も望んでいないことを貴方は常に望んでいる。それが憎いのよ！

「すいませんね」

だから、お願い……。トイレットペーパーを返して……。

「嫌です。というかそれはぼくのものだ！」

きつとそんな感情が彼女からあふれたのだろう。それから僕は彼女の頭をゆっくり頭を撫でる。

「二回言わんでいい」

それはたいして意味のないものだつたのかもしれない。だけど、僕は挫けない。

「それ以上の意味を持たないからだ。だから、これから、僕は旅に出掛ける」

その途中にあつたらもちろん乗るよ。

「次は恋愛機構の本拠地——」

一緒に楽しんで行きましょ。

「僕だつて——」

あー、いけないんだあ！

「ごめんなさいですう」

うつつふ、そうですねえ、君の名は？

「おじいさんですう」

おじさん、君のお胸が見たいの！

「だめですう」

これは珠白金の世界だ。

「18？」

……うん。

「まあ、ダメだからね！」

うん、おいら、頑張るですう。

「ダメよ！ 小父さんの世界はまだ完成していない！  
そうなんだ。」

「そうなんです。というかそこは冷静にならないでよ  
ええ！ いけないんですか？」

「ダメなんだ。君の方を叩きたくなるぐらいダメなんだ」

そうかあ、おじさんもそろそろ青春を感じる時が来たんだなあ。

「何歳？ あなたは何歳のおっさん？」

そうかあ、おじさんはもう小父さんになってしまったんですね。

「いや、ツツコミはむすいですか」

いろいろとあつたなあ。

「なんか思い出してるし。どうした？」

おじさんときあつたマシユマロは今、どこにいるんでしょうねえ。

「お腹の中。詳しくはwebで」

貴様あ！ 玉ねぎをどうしたんだ！ ものアサリを捜させるぞ！

「ごめんさい！ アンコウが傍にいた者でして」

伝令！ 雨の中に敵兵発生！

「今です！」

孔明さあん！ おいらとの勝負に逃げただあ！

「今です」

司馬仲達！ 貴様の作はお見通しだあ！

「マジすかー。そりやないわあ」

あ、やつぱり？

「うん、いろんな意味でごめんなさい」

許さん！ 関羽雲長！ いざ尋常に勝負ですわ！

「そのネタがわかる人がいれば以下のメールに返信をお願いします」

<http://www.jimjounisyoubudesuwa.co.jp/>

「いかにもありそうなアドレスですが嘘なので気にしないでください」

というか、このネタの終わりがわからない。

「まあ、終わりましたようか」

そうだね。じゃあ、玉ねぎを刈ってくるのは誰なんだろう？

「そうだね。アドレスとメールを間違えるぐらいだもん。あの人に決まっているよ」

そっか。やつぱり、私、あなたのことをもっと知りたかった。

「どうしたの？」

私ね？ あなたのことを知って幸せになる心を見つけたの。その心はとても幸せになれるそんなに謝ってほしいぐらい幸せになったの。

「特定の団体名を言わないでよ」

いいのよ。なんと隠したのよ。そしてね、おばさんが笑ってくれたから、今でもずっと。

「お義母さん、よく笑ってたね。どうしてそんなに笑えるのっていうぐらい。でも」

ただいまあ、鳥の雪の道に電車が間もなく通過します。

「あ、もう電車が来ちゃった。でも約束だよ」

うん、あの時の思い出は、もう忘れるから。

「だから」

サヨナラ。

「幸せになれたよ、おじさん」

さあて、俺はこのビデオを観ようかな。

「古い！」

せっかくの最期を壊した馬鹿門はどこにいる！

「はい、カットオ！」